「メタルの基本」がこの100枚でわかる！

伊藤政則　高橋祐希
増田勇一　武田砂鉄
荒金良介　行川和彦
奥村裕司　西廣智一
川嶋未来（SIGH）　長谷川幸信
後藤寛子　山﨑智之
鈴木喜之

編・梅沢直幸

時代を越えて生き続ける、
不撓（ふとう）で不屈（ふくつ）な不朽（ふきゅう）の

メタルバイブルだ！

—KOBAMETAL

神盤、名盤から革命盤まで、一撃必聴の
メタルアルバム100枚、超厳選レビュー!!

「メタルの基本」がこの一〇〇枚でわかる！

伊藤政則　増田勇一　荒金良介　奥村裕司　川嶋未来（S-GH）
後藤寛子　鈴木喜之　高橋祐希　武田砂鉄　行川和彦
西廣智一　長谷川幸信　山﨑智之
編・梅沢直幸

星海社

176

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

「メタル」――世界中の子供から大人、老人まで、3世代にわたって血沸き肉踊らせているこの音楽ジャンルを、日本でもっと広めたい、もっと知ってほしい、もっと堪能してほしい、そんな思いの発露(はつろ)として〝メタルの基本〟をテーマに本書を企画した。本書にて、これだけはぜひとも聴いてほしい「メタルの基本」100枚を厳選し、メタルを熟知した執筆陣による珠玉のレビューをお届けする。

「メタルの基本」100枚の選考基準。

一つはメタルの縦軸(歴史)。

ブラック・サバスを〝メタルの始祖〟とするならば、ブラック・サバスの1stアルバ

ム『Black Sabbath』が発売された１９７０年2月13日こそが、この世にメタルが産声を上げた日……つまり「メタルのはじまり」。
その「メタルのはじまり」から50年以上もの歳月が経った。

異常に重かったり、異常に速かったり、過剰に熱かったり、でもたまに泣けたりする音楽に、約50年もの長い長い歴史があるのだ。

約50年の歴史を背負った歴史的大名盤。
約50年の歴史の中で時代を一気に変えた革命的アルバム。
約50年の歴史の中で一般大衆にまで愛され、想像を遥かに越えたビッグ・セールを記録したアルバム。
約50年の歴史の中で地下世界で延々と祀(まつ)られ続けてきたアルバム。

この歴史の重みを纏(まと)ったアルバムこそ、メタルの真髄(しんずい)なのだ。

「メタルの基本」100枚の選考基準。もう一つはメタルの横軸（枝葉）。

メタルは「進化」と「深化」を繰り返し、様々なサブジャンルを創り出してきた。その様子は、どこまでも果てしなく続く「メタル宇宙」であり、永遠と創造し続ける「メタル曼茶羅（まんだら）」。

正統派メタルに**様式美メタル**
パワー・メタルに**スラッシュ・メタル**
クロスオーヴァーに**グラインドコア**
デス・メタルに**ブラック・メタル**に**メロデス**

ドゥームに**ドローン**に**ストーナー**に**スラッジ**
ネオ・クラシカルに**メロスピ**
グルーヴ・メタルに**ラップ・メタル**
ニューメタルに**メタルコア**に**ラウドロック**
プログ・メタルに**シンフォニック・メタル**
グランジに**オルタナ・メタル**に**インダストリアル・メタル**
フォーク・メタルに**カワイイ・メタル**

もちろん、これは序の口。メタルのサブジャンルの幹（みき）にすぎない。この先にもっともっと枝葉が別れて細かなサブジャンルが存在し、さらにその先にもまたサブジャンルが存在する。

この異常なサブジャンル（枝葉）の多彩さは、そのままアルバムの多彩さとなる。常識を超えたバラエティー感溢れるアルバムたちこそ、メタルの醍醐味（だいごみ）なのだ。

「メタルの基本」をテーマに、このメタルの縦軸（歴史）とメタルの横軸（枝葉）から吟味に吟味を重ねて厳選した100枚がこの本に並んでいる。

そして、この100枚には、メタルのカッコよさが、メタルの面白さが、メタルの楽しさが、メタルの知性が、メタルの狂気性が、メタルの（いい意味での）ダサさが、メタルの（いい意味での）バカらしさが、メタルの（いい意味での）クサさが……メタルの魅力のすべてが詰まっていると言っても過言ではない。

つまり、「メタルの基本」どころか「メタルとは？」の答えがこの100枚に、この本にあるのだ。

メタルに興味を持っているけれど、どのアルバムから聴いてよいのかがわからない人は、是非この本に掲載されている100枚から手に取って欲しい。この100枚さえ聴けば、柔軟なメタル脳を持った立派なメタルヘッズに変貌だ。

メタル歴数十年のダイハードなガチメタルヘッズも、是非この本に掲載されている100枚を今こそ改めて聴いてみてほしい。バラエティー豊かなメタルアルバムの数々に、メタルの素晴しさと面白さを再認識できるハズ。

この100枚を、ジャケットを眺めつつアナログ盤で聴くもよし。CDで聴くもよし。サブスクリプションサービス（定額配信）にて、デジタル環境で聴くのも、もちろんよし。

そして、溢れるメタル愛を持つ執筆陣による渾身のアルバムレビューを読みながら、どのアルバムから聴こうか大いに迷うのもよし。片っ端から聴いてみるのもよし。
メタル仲間と100枚中、何枚持っているかを競い合うのもよし。
あのアルバムが入っていない！　と怒りの声をあげるのもよし。
メタル・トークのネタとして大いに活用してほしい。

ということで……

「メタルの基本」という名の「無限メタル沼」の入口へようこそ！

梅沢直幸（『ヘドバン』編集長）

目次

はじめに 3

AC/DC Back In Black 18

ACCEPT Metal Heart 20

ALICE IN CHAINS Dirt 22

ANGRA Angels Cry 24

ANTHEM Bound To Break 26

ANTHRAX Among The Living 28

ARCH ENEMY Burning Bridges 30

Avenged Sevenfold City Of Evil 32

BABYMETAL METAL GALAXY 34

BARONESS Gold & Grey 36

BLACK SABBATH Master Of Reality 38

BLIND GUARDIAN Somewhere Far Beyond 40

BRING ME THE HORIZON That's The Spirit 42

BULLET FOR MY VALENTINE Scream Aim Fire 44

CARCASS Heartwork 46

CATHEDRAL Forest Of Equilibrium 48

CELTIC FROST To Mega Therion 50

CHILDREN OF BODOM Hate Crew Deathroll 52

CODE ORANGE Underneath 54

CONVERGE Jane Doe 56

Crossfaith EX_MACHINA 58

DEAD END DEAD LINE 60

DEAFHEAVEN Sunbather 62

DEATH Scream Bloody Gore 64

DEF LEPPARD Hysteria 66

DEFTONES Around The Fur 68

DIO HolyDiver 70

DIR EN GREY UROBOROS 72

DOKKEN Under Lock And Key 74

DRAGONFORCE Valley Of The Damned 76

DREAM THEATER Images & Words 78

EMPEROR In the Nightside Eclipse 82

EVANESCENCE Fallen 84

EXODUS Bonded By Blood 86

FAITH NO MORE The Real Thing 88

FEAR FACTORY Demanufacture 90

FLATBACKER 戦争 ―アクシデント― 92

GALNERYUS INTO THE PURGATORY 94

GASTUNK Under The Sun 96

GHOST Prequelle 98

GUNS N' ROSES Appetite For Destruction 100

HELLOWEEN Keeper Of The Seven Keys Part I 102

IRON MAIDEN Iron Maiden 104

JUDAS PRIEST Screaming For Vengeance 106

KILLSWITCH ENGAGE Alive Or Just Breathing 108

KORN Korn 110

KREATOR Pleasure To Kill 112

KYUSS Welcome To Sky Valley 114

LAMB OF GOD Ashes Of The Wake 116

LIMP BIZKIT Three Dollar Bill, Y'all$ 118

LINKIN PARK Hybrid Theory 120

LOUDNESS THUNDER IN THE EAST 122

MACHINE HEAD Burn My Eyes 126

MANOWAR Kings Of Metal 128

MARILYN MANSON Antichrist Superstar 130

MASTODON Blood Mountain 132

MAYHEM De Mysteriis Dom Sathanas 134

MEGADETH Rust In Peace 136

MERCYFUL FATE Melissa 138

MESHUGGAH ObZen 140

METALLICA Master Of Puppets 142

MINISTRY Psalm 69: The Way To Succeed And The Way To Suck Eggs 144

MORBID ANGEL Altars Of Madness 146

MÖTLEY CRÜE Shout At The Devil 148

MOTÖRHEAD Ace Of Spades 150

MICHAEL SCHENKER GROUP The Michael Schenker Group 152

NAPALM DEATH From Enslavement To Obliteration 154

NIGHTWISH Once 156

NINE INCH NAILS The Downward Spiral 158

人間椅子〈NINGEN ISU〉 新青年 160

OPETH Blackwater Park 162

OUTRAGE The Final Day 164

OZZY OSBOURNE Blizzard Of Ozz 166

PANTERA Vulgar Display Of Power 170

PARADISE LOST Draconian Times 172

QUEENSRŸCHE Operation: Mindcrime 174

RAGE AGAINST THE MACHINE Rage Against The Machine 176

RAINBOW Rising 178

RAMMSTEIN Mutter 180

RATT Out Of The Cellar 182

S.O.D Speak English Or Die 184

SABATON The Art Of War 186

SCORPIONS Blackout 188

聖飢魔II〈SEIKIMAII〉 THE END OF THE CENTURY 190

SEPULTURA Roots 192

SKID ROW Slave To The Grind 194

SLAYER Reign In Blood 196

SLEEP Sleep's Holy Mountain 198

SLIPKNOT Iowa 200

SOUNDGARDEN Badmotorfinger 202

SUNN O))) Black One 204

SYSTEM OF DOWN Toxicity 206

THE MAD CAPSULE MARKETS Digidogheadlock 208

TOOL Lateralus 210

TRIVIUM What The Dead Men Say 212

UNITED N.O.I.Q. 214

VENOM Black Metal 216

VOIVOD Killing Technology 218

X BLUE BLOOD 220

YNGWIE J. MALMSTEEN Trilogy 222

執筆者紹介 224

本書掲載アルバムプレイリスト 226

編集後記 227

レビューページの見方

レコード会社

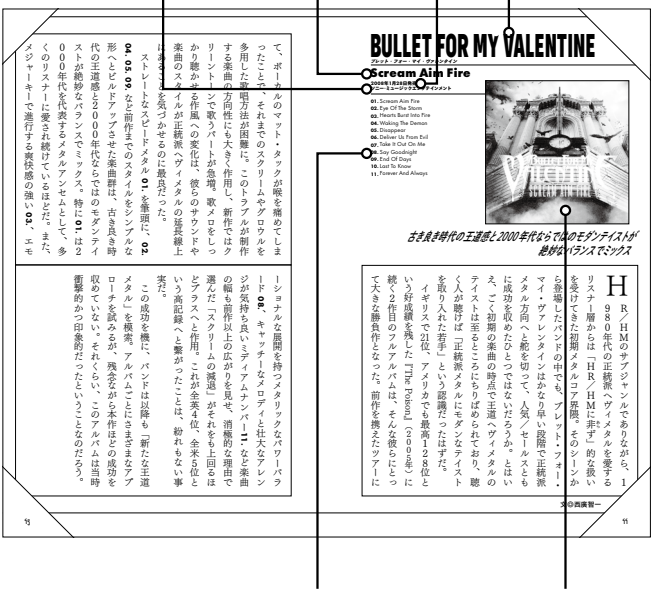
現在、リイシューやリマスター等の再発含めて日本盤 CD が発売中の場合は日本のレコードメーカーを、日本盤が廃盤になっている場合や輸入盤／デジタル配信のみでしか入手できない場合は海外のレコードメーカー（レーベル／マネジメント）を掲載しています。

発売年・月・日

オリジナル盤の発売年月日を、海外アーティストであれば日本盤ではなく、海外でのアルバム発売年月日を中心に掲載しています。

アルバム名

アーティスト名



収録曲

オリジナル盤の収録曲を掲載しています。日本盤ボーナストラックやリマスター盤発売による追加収録等は加えておりません。

ジャケット

オリジナル盤のジャケットを中心に掲載しています。

BLACK SABBATH

ブラック・サバス

Master Of Reality

1971年7月21日発売
Rhino

01. Sweet Leaf
02. After Forever
03. Embryo
04. Children Of The Grave
05. Orchid
06. Lord Of This World
07. Solitude
08. Into The Void

この傑作アルバムの完成と同時に初の日本公演の消滅が抱き合わせになったとすれば、それは運命の大いなる皮肉と言うことになる

英米における評価の高さを考えてみると、我が国におけるブラック・サバスの人気の体たらくはいかんともし難い。その歪な不人気の背景にあるのは、オリジナル編成での来日公演が実現しなかったと言うハンディキャップに加えて、彼らが最も光り輝いていた1970年代初頭に、バンドを押し上げようとする、ブラック・サバス贔屓のマスコミや音楽評論家が日本市場に存在しなかったという事実がある。1971年4月に予定されていた初の日本公演が実現していれば、ひょっとしたら日本における彼らを取り巻く環境は劇的に変わっていたかもしれない。ただ、本作のレコーディングが長引いてしまって、公演が中止された可能性もあり、傑作アルバムの完成と同時に初の日本公演の消滅が抱き合わせになったとすれば、それは運命の大いなる皮肉と言うことに

文◎伊藤政則

なる。

3枚目のこの『Master Of Reality』は、次の4枚目で完成するサウンドの高度な〝整合性〟に対する、いわゆる、前段のスタイルを保持している。つまり、初期2枚が有するダークないかがわしさや、中世の閉ざされた〝村〟の魔女狩りを想起させる恐怖感と言った世界観を、サウンドに流し込んだ作風は継承しつつも、よりダイレクトに届くリアルなヘヴィ・ロックを体現している。オープニングは悪い煙を吸い込んだトニー・アイオミが激しくむせる音で始まる。「Sweet Leaf」とは、そのものズバリである。続く、地を這って聴き手にねじり寄っていく重厚なギター・リフは、このバンドからもはや逃げられないと覚悟を決めたファンを丸ごと呑み込んでいく威力に満ちている。このオープニングの凄まじい緊迫感は、アルバム最後を締めくくる「Into The Void」まで続く。「Into The Void」の強烈な痛みを伴って引きずっていく、粘りのあるリフは、一方では、快楽的な喜びを誘発して、破滅の美学の淵を覗かせる。ライヴの定番曲となる「Children Of The Grave」は、このバンド独特のグルーヴの力強さを際立たせており、回転しながら渦を拡大していく手法が素晴らしい。チューニングを下げてより深くダークサイドを描こうとした最初のアルバムでもあり、**03.** や **05.** のような短いつなぎを入れたことで、全体の流れも見事にまとまっている。オジー・オズボーンの絹を切り裂くようなヴォーカルが、このアルバムの狂気性をさらに高めていることは言うまでもない。

BLIND GUARDIAN

ブラインド・ガーディアン

Somewhere Far Beyond

1992年6月30日発売
Nuclear Blast

01. Time What Is Time
02. Journey Through The Dark
03. Black Chamber
04. Theatre Of Pain
05. The Quest For Tanelorn
06. Ashes To Ashes
07. The Bard's Song – In The Forest
08. The Bard's Song – The Hobbit
09. The Piper's Calling
10. Somewhere Far Beyond

アーサー王伝説やケルト神話など、ファンタジックな異世界をパワー・メタリックに表現することに何より長けている

84年、独クレフェルトでルシファーズ・ヘリテイジとして結成。86年に改名し、88年にデビューを飾った4人組――その第4作。ハロウィンに続くメロディック・パワーの新鋭として注目され、当初はスラッシーですらあるファスト&アグレッシヴなサウンドで頭角を現したが、作を重ねる毎に楽曲のスケール感が増し、遂に本作にて、抜群の疾走感はそのままに、劇的メロディをより効果的に響かせる壮大&壮麗な路線を確立した。

アーサー王伝説やケルト神話、J・R・R・トールキンの『指輪物語』やマイケル・ムアコックの〝永遠のチャンピオン〟シリーズ、スティーヴン・キングの〝ダーク・タワー〟シリーズなど、ファンタジックな異世界をパワー・メタリックに表現することに何より長けており、1曲の中に幾

文◎奥村裕司

つもクライマックスを仕掛け、勇壮かつ壮観なメロディが次々と繰り出されるドラマに次ぐドラマといった楽曲展開が最大の武器だ。また本作では、ケルティックでフォーキーなムードも強化。アコースティック連作**07.08.**は、パワー・メタルとは対極にある牧歌的幻想ムードが何とも言えず見事で、ライヴでは時にバンド演奏が聴こえなくなるぐらいの大合唱を巻き起こすことも。あまりの人気っぷりに、**07.**を再録して03年にシングルとして発表したところ、本国チャートで第40位にランク・インしたというから凄い。

本作のラインナップは、ハンズィ・キアシュ(Ba./Vo.)、アンドレ・オルブリッヒ(Gu.)、マーカス・ズィーペン(Gu.)、トーマス〝トーメン〟スタッシュ(Dr.)で、これは05年にトーメンが脱退するまでずっと不動だ。そして、次作『Imaginations From The Other Side』(95)でオーケストレーションをさらに分厚く濃密にし、どんどんシンフォニックな重厚感を増していった彼等は、汎ヨーロッパで絶大な人気を獲得しまくり、一時はメンバー自ら、「俺達はヨーロッパでアイアン・メイデンの次にビッグなバンドだ」と豪語することすらあった。その後、97年にハンズィがヴォーカル専念し、以降はセッション・ベーシストを起用。19年には、オケだけをバックにハンズィが歌い、バンド演奏が一切ないブラインド・ガーディアン・トワイライト・オーケストラ名義によるアルバム・リリースでファンのド肝を抜いた。

BRING ME THE HORIZON

ブリング・ミー・ザ・ホライズン

That's The Spirit

2015年9月11日発売
ソニー・ミュージックエンタテインメント

01. Doomed
02. Happy Song
03. Throne
04. True Friends
05. Follow You
06. What You Need
07. Avalanche
08. Run
09. Drown
10. Blasphemy
11. Oh No

サブスクリプションサービスが普及し始めたタイミングならではの「アルバムというよりプレイリスト」的な作品集

エクストリームメタルのサブジャンルのひとつ、デスメタル／デスコアをベースにした音楽性で活動を開始したブリング・ミー・ザ・ホライズン。２０００年代半ばに登場した彼らも、同じＵＫシーンで活動していたブレット・フォー・マイ・ヴァレンタインと同様、作品を重ねるごとにその音楽スタイルを変化させていったバンドの代表格だ。しかし、ＢＦＭＶがより王道へと近づこうとしていたのに対し、このＢＭＴＨはどんどんオルタナティヴな方向へと進化を続けている。

日本でもそのバンド名が知られるきっかけとなった2nd アルバム『Suicide Season』（２００８年）ではデスコアにデジタルサウンドを取り入れ、早くも「単なるデスコアバンドとは違う」ことを匂わせる。そして、４作目『Sempiternal』（２０１３年）の制作でツインギターの片割れが脱退し、代

文◎西廣智一

わりにキーボーディストが加入したことでアレンジや楽曲のテイストが激変。ミディアムテンポでしっかり聴かせる楽曲スタイルや親しみやすいシンガロングパートの急増など、〝わかりやすさ〟が一気に増したのだ。

その極め付けとなったのが、続く5thアルバムとなる本作だった。メタルコアを軸にしながらも歌メロをじっくり聴かせ、ポップスやオルタナティヴロック、エレクトロなどの要素を織り交ぜることで多様性が急増。内容的にも**02. 03. 09.**などアンセミックなスタジアムロックに加え、ストリングスがドラマチックさを演出する**04.**、ヒップホップやR&Bなどからの影響も垣間見える**05.**、もはやデビュー時の面影皆無なエレクトロ調の**08.**など、サブスクリプションサービスが普及し始めたタイミングならではの「アルバムというよりプレイリスト」的な作品集と言えなくもない。

そういった挑戦が時代と見事にフィットし、本作は全英・全米ともに2位という大成功を収める。そして、その方向性を突き詰めることで、続く『Amo』（2019年）では一般的なメタルの枠に収めるのが難しい拡散方向へとシフト。このアルバムではついに全英1位を獲得することになる。同作を最後に「アルバム制作はやめる」と宣言した彼らだが、以降はEPという形でまとまった作品集をリリース。こういった「プレイリスト的」な制作手法、今思えば本作がターニングポイントだった……そう思わずにはいられない。

CARCASS

カーカス

Heartwork

1993年10月18日発売
Earache Records

01. Buried Dreams
02. Carnal Forge
03. No Love Lost
04. Heartwork
05. Embodiment
06. This Mortal Coil
07. Arbeit Macht Fleisch
08. Blind Bleeding The Blind
09. Doctrinal Expletives
10. Death Certificate

メロディック・デス・メタルという新たなジャンルを切り開いた、メタルの歴史に燦然と輝く名盤

カーカスの登場は衝撃であった。88年のデビュー・アルバム『Reek Of Putrefaction』のジャケットは、本物の死体写真がギッシリとコラージュされ、当時日本に入ってきた輸入盤の中には性器部分が黒く塗りつぶされているものまであった。22曲入りで39分。曲名はすべて「吐き戻された肛門管」みたいな感じで、さらに中身は極悪音質でほとんど何をやっているか聞き取れないグラインドコアと、とにかくめちゃくちゃの極みであった。ところが、セカンド・アルバム『Symphonies Of Sickness』では曲も「普通の」長さとなり、それなりに華麗なギターソロまで聞かせるようになる（内ジャケは相変わらず死体コラージュだったが）。

90年、カーカスに大きな転機が訪れる。現アーチ・エネミーのギタリスト、マイケル・アモット

文◎川嶋未来（SIGH）

の加入だ。実はセカンドのリリース以前も、ビル・スティアは一度マイケルをカーカスに誘っている。しかし、この時はマイケルが拒否（『Reek of Putrefaction』が酷すぎたので、あれなら自分でバンド、カーネイジを続けている方が良いと思ったからだそう！）。そんなマイケルを迎えて制作されたサード・アルバム『Necroticism – Descanting The Insalubrious』ではデス・メタルの範疇に留まりながらも、さらにメロディックなアプローチを見せる。

そして、その2年後にリリースされた本作で、ついにその後メロディック・デス・メタルと呼ばれることになるまったく新しいスタイルを提示してみせる。当時、どのバンドも同じようなサウンドになってしまったデス・メタルにウンザリしていたというマイケル。もともとNWOBHMを聴いて育ったビルも、この頃一周回って再びトラディショナルなヘヴィメタルを好むようになっていた。**06.**のメインリフができた時、マイケルは「これはまったく新しい音楽だ」と思ったそう。一方で、この新しいスタイルに、どうファンが反応するかが気がかりだったという彼らだが、その不安はある程度的中する。日本では、逆に本作でカーカスが認知された感もあったのだが、欧米においては悪いレビューも少なくなく、セールス自体も振るわなかったのだ。だが、今では本作は、メロディック・デス・メタルという新たなジャンルを切り開いたメタルの歴史に燦然（さんぜん）と輝く名盤として認知されるに至っている。新しすぎるものが理解されるには、時間が必要という好例だ。

CATHEDRAL

カテドラル

Forest Of Equilibrium

1991年10月21日発売
Earache Records

01. Picture Of Beauty & Innocence (Intro) / Comiserating The Celebration
02. Ebony Tears
03. Serpent Eve
04. Soul Sacrifice
05. A Funeral Request
06. Equilibrium
07. Reaching Happiness, Touching Pain

これぞ、聴き手をじっとりと洗脳していく、イリーガルな音楽

遅くて、重い。ブラック・サバスが開拓した道を、さらに掘り下げるのがドゥーム・メタルだ。

ナパーム・デスに所属し、どこまでも速い音楽を求めていたリー・ドリアンが、どこまでも遅い音楽を作る。サイケデリック、プログレッシヴ、フォークなど、ロックの本道ではなく側道に転がる養分をかき集めながら泥水で煮込んだようなカオス。どんなにカラフルな絵の具を混ぜようが、最後に大量の黒をぶちまければ、濃い灰色を発するように、カテドラルの音楽は淀みながら妖しく発光する。

とにかく遅い。とにかく重い。初めて聴いた人は、この再生スピードで合っているのかと疑うはずだが、これぞ、聴き手をじっとりと洗脳していくイリーガルな音楽。リフが体に覆いかぶさって

文◎武田砂鉄

くる。ギャリー・ジェニングスのリフワークは重石のようだ。デビュー作がリリースされたのは1991年。アメリカではグランジ／オルタナが勃興し始めるが、そこにある陰鬱さとは構造が異なる。グランジのそれが内省的だったとすれば、ドゥームメタルのそれは世界をまるごと沈めるような圧がある。このアルバムを何度か再生すれば、その「まるごと」が読み解けるはずである。

デビュー作から作品を重ねていく中で、緩急を覚えていくが、低いリフを主軸にする姿勢に変化はない。98年の5枚目『Caravan Beyond Redemption』でキャッチーささえ獲得するが、泥沼から顔を出したポップセンスは、最終的には低く沈んでいく。沈むために舞う、という彼ら特有の手法は、いくつかの同型バンドを生んだが、結局のところ、始祖が別格であると立証しただけとなった。

2013年の『The Last Spire』を最後に解散したが、リーは、With The Dead や Septic Tank としての活動を続けながら、自身のレーベル・Rise Above Records でバンドの発掘を続けている。

ブラック・サバスが解散した現在、低い・重い・遅いという、世間の多くが求めているわけでは思えない、だが一部が熱狂的に求め続ける三拍子を提供してくれるのはやはりリー・ドリアンに違いない。このバンドが生まれてから30年が経過したが、リーとギャリーは Septic Tank で活動を共にしている。Cathedral としての再始動を期待し続けたい。

CELTIC FROST

セルティック・フロスト

To Mega Therion

1985年10月27日発売
Noise Records

01. Innocence And Wrath
02. The Usurper
03. Jewel Throne
04. Dawn Of Meggido
05. Eternal Summer
06. Circle Of The Tyrants
07. (Beyond The) North Winds
08. Fainted Eyes
09. Tears In A Prophet's Dream
10. Necromentical Screams

不穏かつ不吉な黙示録の世界を音と曲と歌詞で展開する
殺伐としたエナジーに、畏怖の念すら抱く

2000年代の終盤以降はトリプティコンで意欲的な活動をしているスイス出身の〝メタル戦士〟トム・G・ウォリアー（Vo./Gu.他）が率いた、最重要ヘヴィ・メタル・バンドのファースト・フル・アルバム。いぶし銀の輝きの残虐な気品と威厳に満ちた究極のエクストリーム・メタルだが、スラッシュ・メタル、ドゥーム・メタル、ブラック・メタルをやっているわけではない。そのすべてのオリジネイターの一つだからこそ決まり切ったスタイルを根元から破壊する混血作だ。

たとえ速いパートだろうと米国産スラッシュ・メタル・バンドによくあるスッキリ感の真逆で気が晴れず陰鬱に加速し、ドゥーミーなスロー・パートも遅いだけでなくサウンドが重く粘っこく底無しの終末感で覆い尽くす。短めの曲も効果的に使い、不穏かつ不吉な黙示録の世界を音と曲と歌

文◎行川和彦

詞で展開する殺伐としたエナジーに畏怖の念すら抱く。何しろ意識が宿る楽器の音や歌声そのものの鳴りが強靱である。一切のポーズ無しということはヤバい空気プンプンの凶暴な響きから伝わってきて、ギター・ソロひとつとっても危険だ。ドヤ顔が目に浮かぶ尊大な調子のヴォーカルが冴えわたるトム独特の「ウッ！」という掛け声も、バッチリ収録されている。

80年代初頭のＵＫハードコア・パンク・スタイルから移行しつつあった頃にナパーム・デスがファーストの『Scum』（１９８７年）で、本作のクールなスロー・リフから影響を受けたこともよくわかる音だ。トリオ・バンド編成でのレコーディングながら曲によってフレンチ・ホルンや女性ヴォーカルがゲストで参加し、邪悪でありながら格調が高くて彫りの深い仕上がりに一役買っている。母国のアーティストの〝先輩〟で映画『エイリアン』のエロチックな造形デザインで知られるＨ・Ｒ・ギーガーが手がけたジャケットも、本作の表現にフリーキーな息を吹き込んでいる。

次作の『Into The Pandemonium』（１９８７年）ではゴシック・メタルを先駆け、続く『Cold Lake』（１９８８年）ではＬＡメタルに接近するなど、以降しばらく路線転換したのも、絶対的な完成度ゆえにこのアルバムが自分たちも超えられない壁だったからである。エクストリーム・メタルの最高峰と断言したい。

CHILDREN OF BODOM

チルドレン・オブ・ボドム

Hate Crew Deathroll

2003年1月6日発売
ユニバーサル ミュージック

01. Needled 24/7
02. Sixpounder
03. Chokehold (Cocked 'N' Loaded)
04. Bodom Beach Terror
05. Angels Don't Kill
06. Triple Corpse Hammerblow
07. You're Better Off Dead!
08. Lil' Bloodred Ridin' Hood
09. Hate Crew Deathroll

バンドのスケールを大きく広げ、本作で本国フィンランドにて初の1位を獲得

80年代に多くのギターヒーローが誕生し活躍を続ける傍ら、90年代はリフがメインのヘヴィロックや個性的なグルーヴを生み出すリズムパートの人気が高まる傾向にあった。そんな中、00年代メタルシーンを衝き動かすギターヒーローとして登場したのが、チルドレン・オブ・ボドムのアレキシ・ライホだ。10代で結成し、ヴォーカル&ギターとしてバンドを率いながら、ほぼ全曲の作詞作曲を担当。なんと18歳でデビューアルバム『Something Wild』をリリースした。早熟の才能、華やかな容姿でヴォーカルを務めながらテクニカルなギターを弾きまくる姿は、まさに新世代のロックスターというべき存在感を放った。

4thアルバムとなる今作は、そんなアレキシ節と、当時全員が20代だった各メンバーの高いスキルが、アグレッシヴな方向に結実。スラッシーで

文◎後藤寛子

ヘヴィなリフが増えて音に厚みが増し、特に従来からの持ち味であるヤンネ・ウィルマンのキーボードとギターフレーズの絡みがより個性的なレベルに昇華した。疾走感満載の**01.**から、ミドルテンポでリフを刻む**02.**、シンフォニックなイントロとギターのハモりが美しい**05.**、**06.**では「WOWOW」と掛け合いのコーラスが入るなど、モダンヘヴィネス的アプローチも新しい。デスメタルの様式美を継承しながら、さらにキャッチーな要素が加わったことで、バンドのスケールを大きく広げ、本国フィンランドではアルバムで初の1位を獲得。日本でも高い評価を得た。アルバムを締め括るタイトル曲である**09.**は、力強いリフとアレキシの咆哮を軸に突き進みながら、中盤のキメとギターソロ、さらにサビ裏で響くメロディアスなギターフレーズと、チルドレン・オブ・ボドムの美学が詰まった名曲だ。

若くしてデビューしてこれだけはっきりと独自のスタイルを築き上げてしまった反動か、その後はバンドの方向性をなかなか更新するに至らず、人気は継続しながらも、２０１９年にメンバーが離別。バンドは事実上解散を迎える。さらに、２０２０年12月にアレキシが急逝し、41歳という早すぎる終焉に世界中が悲しみに暮れた。10代でギターヒーローとなり、約20年で歴史を閉じたチルドレン・オブ・ボドム。その鮮烈な個性と功績は、メタル史に深く刻まれている。

CODE ORANGE

コード・オレンジ

Underneath

2020年3月13日発売
ワーナーミュージック・ジャパン

01. (deeperthanbefore)
02. Swallowing The Rabbit Whole
03. In Fear
04. You And You Alone
05. Who I Am
06. Cold.Metal.Place
07. Sulfur Surrounding
08. The Easy Way
09. Erasure Scan
10. Last Ones Left
11. Autumn And Carbine
12. Back Inside The Glass
13. A Sliver
14. Underneath

グラミー賞ノミネートの前作から本作にて野心的・衝撃的な変貌を遂げる

米国出身のコード・オレンジによる最新作は、現在シーンの最前線で旗を振っている作品と呼ぶにふさわしい画期的なアルバムだ。バンドのデビューは2012年。ハードコア・パンクやメタルコアを核としつつ、エレクトロニカやヒップホップ等さまざまな影響元を咀嚼した上でメタルを表現するスタイルを武器とし、コンヴァージのカート・バローによるプロデュースを受け1st、2ndとリリースを続けた。レーベルをロードランナー・レコードへと移し発表された2017年の『Forever』では音楽性をさらに進化させ、ドゥーム／ストーナー的な激重リフを主体としたヘヴィネスを披露。バンドの知名度・注目度は一気に高まり、同作でグラミー賞ノミネートを果たす結果をもたらした。

その成功から3年ぶりにリリースされたこの『Un

文◎高橋祐希

derneath』で、コード・オレンジは野心的・衝撃的な変貌を遂げ我々の度肝を抜く。冒頭からいきなり不穏かつ強烈なノイズを響かせ、間髪を容れず**02.**ではプログラミング・サウンドも交えたメタリックなハードコアでリスナーを殴りにかかる。以降、すさまじいテンションとギラつきと凶暴さに満ちた楽曲で全編を一気に聴かせる当代最強格のアルバムだ。サンプリングやデジタル要素を大胆に導入しているが、それにより楽曲のインパクトとメリハリはむしろ向上。冷酷極まりないインダストリアル・メタル感は近年のミニストリーとも共通し、また容赦なくヘヴィネスを畳み掛け押しつぶしてくるその殺傷力はストラッピング・ヤング・ラッドあたりにも通じる。フー・ファイターズやラッシュ、コーンを手掛けるニック・ラスクリネッツ、ナイン・インチ・ネイルズやマリリン・マンソンらの作品に参加していたクリス・ヴレナを制作陣に加えたことも、隙のない一流のメタル・サウンドを構築する上で効果的に作用している。

　またこのバンドに関して見逃してはならないのが、メロディーの根底にあるグランジ／オルタナからの影響だ。彼らは本作の後アンプラグド・ライヴ盤『Under The Skin』をリリースしており、装飾が取り払われたことでそこに宿るオルタナ要素がむき出しとなった楽曲の姿を確認することができる。ぜひ本作とセットで聴き、コード・オレンジのヘヴィネスの深さ・濃さを感じ取ってほしい。

CONVERGE

コンヴァージ

Jane Doe

2001年9月4日発売
Equal Vision Records

01. Concubine
02. Fault and Fracture
03. Distance and Meaning
04. Hell to Pay
05. Homewrecker
06. Broken Vow
07. Bitter and Then Some
08. Heaven in Her Arms
09. Phoenix in Flight
10. Phoenix in Flames
11. Thaw
12. Jane Doe

「21世紀のメタル」を世に示したマスターピースにしてメタルコア不滅の名作

1990年にマサチューセッツで、ヴォーカリストのジェイコブ・バノンとギタリストのカート・バルーを中心に結成されたコンヴァージが、ベーシストにネイト・ニュートン、ドラマーにベン・コラーを迎えて完成させた4作目のアルバム。優秀なミュージシャン2人が加わったことで、作曲・演奏面ともに進化／深化を遂げ、メタルコア不滅の名作が誕生した。この時点ではまだ在籍していたセカンド・ギタリストが本作リリース後に脱退して以降、バンドはこの4名が不動のラインナップとなっている。

魂を切り裂くような絶叫とともに、ステージでカリズマティックなオーラを放つジェイコブは、彼らのアイコンとなった本作のジャケットをはじめ、美麗なアートワークも手がけるグラフィック・アーティストであり、さらにデスウィッシュとい

文◎鈴木喜之

うレーベルも運営。一方のカートは、地元マサチューセッツにゴッドシティというスタジオを構え、数多くのバンドをプロデュースするレコーディングのプロフェッショナル。そして、自らがフロントに立つドゥームライダーズをはじめ、複数のバンドで活躍するネイトは、それらが対バンする時は2組のセットを連続でこなしてみせるタフガイ。同じくミュートイド・マンなど多くのバンドでブッ叩きまくるベンは、手練(てだ)れの多いこの界隈でも特筆すべき豪腕プレイヤーだ。こうした破格の能力を携えた4人が、バンド名の通り一極集中して巻き起こす凄まじい音の渦は、まさしくエクストリーム・ミュージックの究極形（二重表現！）であり、それを初めて完璧に刻みつけた本作は、各方面から絶賛の嵐を浴びた。多くのメディアで「00年代のベスト・アルバム」に選出され、カート自身も「最初から最後まで誇りに思える最初のアルバムだ」と発言している。

オープニング・トラックからいきなり持っていかれ、いったんテンポを落とした不穏なナンバー**04.**でタメておいてからの、**05.**で何もかも吹き飛ばす大爆発、ラストを飾る11分超のタイトル曲まで、ひたすらアグレッシヴに尋常でないテンションを保ちながら、同時に、しっかりと耳を引くフックも持ち合わせている。２０１７年には、このアルバムを完全再現したライヴ作品『Jane Live』もリリースされた。

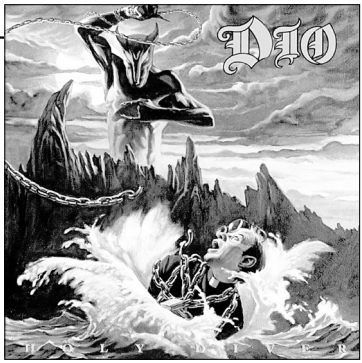
コンヴァージの名をシーンに轟かせた本作は、まさしく「21世紀のメタル」を世に示したマスターピースだが、その発表から20年を経た現在もなお、彼らは着実に前進し続け、ハードコア／メタルの最突端に屹立(きつりつ)し続けている。

DIO
ディオ

HolyDiver

1983年5月23日発売
ユニバーサル ミュージック

01. Stand Up And Shout
02. Holy Diver
03. Gypsy
04. Caught In The Middle
05. Don't Talk To Strangers
06. Straight Through The Heart
07. Invisible
08. Rainbow In The Dark
09. Shame On The Night



浮世のヒット・チャートとは一線を画した世界観を提示する

"DIO＝神"の名を持つ稀代のヴォーカリスト、ロニー・ジェイムズ・ディオ率いるディオのファースト・アルバム。彼がレインボー、ブラック・サバスで培った重厚で刺激的なハード・ロック／ヘヴィ・メタルが解き放たれる。

ライヴの興奮と熱狂をありったけ注入した「Stand Up And Shout」からヘヴィネスとメロディ、ダイナミズム、ドラマ性のすべてが全開。聴く者を異空間へといざなう。

重低音ギター・リフが大地を揺るがす「Holy Diver」、起伏に富んだ展開の「Don't Talk To Strangers」、鉄壁のリズム・セクションに支えられた「Shame On The Night」など、浮世のヒット・チャートとは一線を画した世界観を提示する本作は、ポップ路線を突き進む古巣レインボーと対称的な作風だった。

文◎山崎智之

ただアルバムの全曲を〝歌える〟メロディが貫いており、特に「Rainbow In The Dark」のキャッチーなフックは後に「Hungry For Heaven」「Rock 'N' Roll Children」に受け継がれる、ディオ流ポップへの挑戦だ。

1990年代以降のディオで顕著となるミッドテンポのグルーヴも既に「Straight Through The Heart」「Invisible」などで効果的にフィーチュアされている。

ロニーを中心に、バンドを構成するのは元レインボーのジミー・ベイン（Ba.）と元ブラック・サバスのヴィニー・アピス（Dr.）という旧知のミュージシャン、そして北アイルランド出身のヴィヴィアン・キャンベル（Gu.）。フル・ピッキングで荒々しく弾きまくるヴィヴィアンは一躍、新世代のギター・ヒーローとなった。後にホワイトスネイク、デフ・レパードで活躍する彼のメジャー・デビュー作であり、最も大胆かつ鮮烈なリード・プレイを聴くことが出来るのが本作だ。

ロニーのヴォーカルも冴えわたり、伸びやかで艶のある歌声で魅せる。1950年代にデビュー、2010年に亡くなるまで半世紀以上のキャリアを誇り、数多くの名盤を生み出してきた彼のベスト・パフォーマンスのひとつが本作のものといえる。ロニー自身もレインボー『RISING』、ブラック・サバス『HEAVEN AND HELL』と並んで〝ロックの歴史に自分の名前を刻むことが出来た〟代表作として本作を挙げており、完全再現ライヴが行われたのも本作だった（CD/DVD『HOLY DIVER LIVE』〈2006〉として発表）。

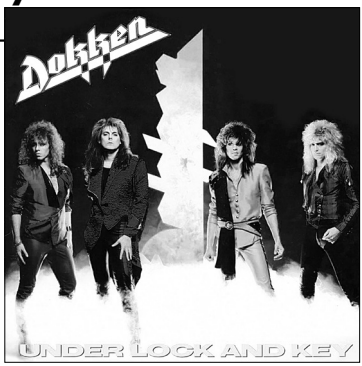
DOKKEN

ドッケン

Under Lock And Key

1985年11月19日発売
ワーナーミュージック・ジャパン

01. Unchain The Night
02. The Hunter
03. In My Dreams
04. Slippin' Away
05. Lightnin' Strikes Again
06. It's Not Love
07. Jaded Heart
08. Don't Lie To Me
09. Will The Sun Rise
10. Til The Livin' End



ポピュラリティに磨きをかけた盤石のドッケン節を本作で開花

メロディ、テクニック、ハーモニーの三拍子を揃え、数多くの名曲を量産してきたドッケン。彼らはクワイエット・ライオット、モトリー・クルー、ラットに続けと、ドン・ドッケン(Vo.)を中心にLAで結成される。

81年に1stアルバム『Breakin' The Chains』をフランスのレーベルから発表。その後にジェフ・ピルソン(Ba.)が加入し、2ndアルバム『Tooth And Nail』で一躍脚光を浴びる。表題曲や「Don't Close Your Eyes」の攻撃性に長けたナンバーに加え、ポップ&キャッチーな「Just Got Lucky」や「Into The Fire」、さらに名バラード「Alone Again」とキャラ立ち抜群の楽曲で多くのファンを巻き込んだ。

そして、この3rdアルバムでは音質の向上を図り、前作と比べて激しさは控えめに、聴きやすさ

文◎荒金良介

を重視したミドル・テンポの楽曲で勝負。ポピュラリティに磨きをかけた盤石のドッケン節をここで開花させている。

甘美なルックスと奇抜なファッションで衆目を集めたLAメタル勢の中で、アメリカ的な感性にヨーロッパの叙情性を加味させたドッケンの音楽には胸を締め付ける哀愁が漂っている。そこに一役買っているのは、ドン・ドッケンというフロントマンの存在だ。繊細さを極めた透き通るハイトーン・ボイスは、聴けばすぐに彼とわかる美声。そこにジョージ・リンチ（Vo）の卓越したギターが絡み合うことで極上のケミストリーを生み出している。

また、美しいコーラス・ワークにも定評があり、イントロからその魅力を発揮する**03.**は白眉。ドン・ドッケンの甘美な歌メロから始まるバラード風味の**04.**、わかりやすいポップ性を突きつける**05.**など、どれも一級品のメロディ・ラインで日本人の心の琴線を刺激する。本作は作品トータルのバランスという意味でも名盤に値する出来栄えだ。

バンドは次作4thアルバム『Back For The Attack』を最後にドン・ドッケンとジョージ・リンチの不和により一度解散。こちらは「Kiss Of Death」を筆頭に前作とはまた違うスリリングな緊張感に貫かれた快作と言えるだろう。

LAメタル界隈で、見た目云々ではなく、楽曲の良さで語りたくなる職人気質のコンポーザーぶりを遺憾なく発揮した彼ら。時代もジャンルも超えた楽曲群は、老若男女に響くポテンシャルを秘めている。一度触れたら、全作品に手を伸ばしたくなるだろう。

聖飢魔II

SEIKIMA II

THE END OF THE CENTURY

1986年4月2日発売
ソニー・ミュージックエンタテインメント

01. 聖飢魔 II ミサ曲第Ⅱ番「創世紀」
02. The End Of The Century
03. Demon's Night
04. 悪魔の讃美歌
05. Jack The Ripper
06. 蠟人形の館
07. 怪奇植物
08. Fire After Fire

一般層にヘヴィ・メタルを布教することに成功した聖飢魔IIが、人間たちをさらに洗脳すべく発布した第二大教典

魔暦前14年（85年）に地球デビューした聖飢魔Ⅱ。しかし第一大教典（ファースト・アルバムともいう）がヘヴィ・メタル専門雑誌から0点を付けられ、聖飢魔Ⅱを邪道のメタル・バンドとして見る向きも少なくなかった。

だが〝音楽を媒介に悪魔教を広めるために人間界に降臨した悪魔〟というコンセプトや、黒ミサ（ライブのようなもの）における徹底的に作り込まれた衝撃的なライブ・パフォーマンス、そして何よりも演奏技術の確かさと曲の良さで、信者（熱狂的ファン）を一気に増やしていった。聖飢魔Ⅱが地球デビューした当時、日本のメタル・バンドも盛り上がってきていたが、10万枚以上のセールスを叩き出したのは聖飢魔Ⅱが初めて。

早くも一般層にヘヴィ・メタルを布教することに成功した聖飢魔Ⅱが、人間たちをさらに洗脳す

文◎長谷川幸信

べく発布した第二大教典が本作だ。

聖飢魔Ⅱの創始者である地獄の大魔王＝ダミアン浜田殿下は、すでに魔界に帰還していたが、数多くの楽曲を聖飢魔Ⅱに託しており、本作の8曲中6曲がダミアン浜田殿下の作詞作曲（うち1曲の作詞はデーモン閣下と共作）ナンバー。またプロデュースをバンド自身が行なうことで、第一大教典以上に色濃く魔界の調べを詰め込んでいる。

ホラー映画のイントロダクションのごとくデーモン閣下の語りで幕を開け、ツイン・ギターで織りなす恐怖のメロディが広がれば、聴き手はメロウィック・サインを捧げるしかない。**01.**は当時の黒ミサでもオープニングでよく披露され、この曲に誘われるようにデーモン閣下は棺桶から怪しい煙と共に姿を現わすのだ。そしてデーモン閣下の高笑いを合図に**02.**へ突入。その後も各曲のイントロにはデーモン閣下の語りを入れるなど、黒ミサを想起させる。聴覚ばかりでなく、視覚も刺激するというプロデュースは秀逸だ。曲そのものも、ブリティッシュ・ヘヴィ・メタルの重金属ぶりを受け継ぎながら、美しき旋律や哀愁のメロディを融合。歌詞の濃厚な世界観と結びつきながら、魔力を持ったヘヴィ・メタルを具現化。メタルに取り憑かれた人間であるなら、ひれ伏すのみ。王道とか邪道とか論ずるのは無粋の極みである。

ちなみに2020年12月、かのメタル専門誌の現編集長が、0点事件のことを聖飢魔Ⅱに正式に謝罪した。

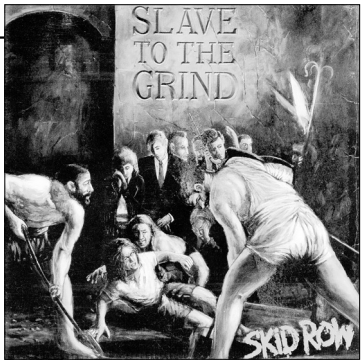
SKID ROW

スキッド・ロウ

Slave To The Grind

1991年6月11日発売
ワーナーミュージック・ジャパン

01. Monkey Business
02. Slave To The Grind
03. The Threat
04. Quicksand Jesus
05. Psycho Love
06. Get The Fuck Out
07. Livin' On A Chain Gang
08. Creepshow
09. In A Darkened Room
10. Riot Act
11. Mudkicker
12. Wasted Time



**全米アルバム・チャート初登場1位という
メタル史上初の快挙を達成**

二ュージャージーという地名からメタル愛好家たちが真っ先に連想するのはブルース・スプリングスティーンよりもボン・ジョヴィだろう。このスキッド・ロウもまた同地出身で、ジョン・ボン・ジョヴィが少年期に活動を共にしていたデイヴ・セイボ（Gu.）、作曲面での要であるレイチェル・ボラン（Ba.）を軸としながら1986年に結成され、他ならぬジョンの全面的バックアップを獲得しながら1989年にセルフ・タイトル作でデビュー。若気の至りのテーマソングのごとき“Youth Gone Wild”をはじめとするシングル・ヒットにも恵まれ、いきなり全米アルバム・チャート6位、500万枚超えという成功をおさめ、スターの仲間入りを果たしている。そして、ロング・セラーとなった同作の勢いが鎮火せぬうちに登場したのがこの第二作だった。

文◎増田勇一

前作に続き、メタル界では定評のあるマイケル・ワグナーをプロデューサーに迎えて制作された本作では、このバンドの音楽の両極がより明確に浮き彫りにされる結果となっている。鉄板曲のひとつとなった表題曲 **02.** のような加速度を伴いながら絶頂へと向かうメタル・チューンと、**06.** や **10.** のようなパンク・ソングの共存はことに象徴的だ。いわばジューダス・プリーストとラモーンズをどちらも自分たちのルーツだと堂々と言い切れるスタンスを持つのが彼らであり、そこがボン・ジョヴィとも典型的ＬＡメタルとも音楽的に一線を画する独自性となっていた。しかも持ち前のストリート感覚にはグランジ／オルタナティヴとの同時代性もあり、まさしく彼らが90年代を牽引するに相応しいバンドであることを確信させる匂いが伴っていた。本作に伴うライヴ展開がガンズ・アンド・ローゼズの前座として始まり、パンテラやサウンドガーデンを従えながらのヘッドライン・ツアーへと続いていった流れも、当時の彼らの立ち位置を物語っている。

実際、本作の登場に際しての世の期待感がいかに高かったかは、全米アルバム・チャート初登場1位というメタル史上初の快挙にも裏付けられている。ちょうどビルボードの集計システム変更により実売数が時差なく反映されやすい形になった直後のことで、彼らは同じ年に発表されたメタリカのブラック・アルバムやガンズの2作品よりも先にそうした快記録を達成することになった。このバンドがこのままの状態で続いていれば、以降のメタル史も違っていたはずである。

執筆者紹介

＊五十音順

川嶋未来（SIGH）

ブラック・サバスのデビュー・アルバムより少々年上の1970年1月18日生まれ。10代でスラッシュ・メタルにハマり、50を過ぎた今もその沼から抜け出せていない。エクスペリメンタル・メタル・バンドSIGHのヴォーカル、シンセサイザー、フルート、尺八担当。

後藤寛子

1984年生まれ、兵庫県出身。『ROCKIN'ON JAPAN』編集部を経て、現在はフリーランスの編集者／ライターとして活動中。音楽はメタル／J-POP／邦ロック／ヴィジュアル系／アイドルなんでもありのほか、映画やアニメなどのエンタメ／カルチャー関係でも執筆中の雑食ライター。

鈴木喜之

スタンダードな音楽より、既存のスタイルから逸脱した表現、要するに「変なもの」を好みます。「メタルは様式主義」と言われがちで、自分もそう考えていましたが、今や先鋭的な表現を生み出す最重要フィールドですね。そして、本書に掲載された「基本」の多くが、登場時には「規格外」であったことに改めて気づかされました。

高橋祐希

音楽ライター。『ヘドバン』『EURO-ROCK PRESS』誌にてコラム連載中。即興ノイズ／アンビエント音楽でライヴ活動もやってます。現代のプログレッシヴ・ロック／プログレッシヴ・メタルに焦点を当てた監修書籍『PROG MUSIC Disc Guide』発売中。そちらもよろしくお願いします！

荒金良介

大分県出身、1999年からフリーの音楽ライターとして執筆開始。レッド・ツェッペリンで音楽に目覚め、ハードロック／ヘヴィメタルを貪るように聴き始める。その後、ニューメタル、ミクスチャー、ハードコア、パンクなどに手を出し、洋邦問わずにうるさい音楽が好み。世界一好きなギタリストはランディ・ローズ。

伊藤政則

音楽評論家。日本のハード・ロック／ヘヴィ・メタル界のオピニオン・リーダー的存在。アルバムのライナー・ノーツ、音楽専門誌のレギュラーページはもちろん、ミュージシャンの伝記など幅広い執筆活動を展開。また、ラジオDJとしても活躍中。海外のアーティストからの信頼が厚く、"MASA"の愛称で親しまれている。

奥村裕司

音楽ライター。雑誌編集部を経て、1992年フリーに。泣きと哀愁、暗黒と幻想を求めて、劇的かつ勇壮、荘厳で耽美なこの世ならざる音に耽溺。平時であれば、海外のメタル・フェスに出没して撮影にも勤しむ。

増田勇一（ますだ ゆういち）

東京都出身。学生時代より雑誌編集に携わり、1983 年の『US フェスティヴァル』開催時に初渡米。国内初のヘヴィ・メタル専門誌『BURRN!』編集部に創刊時から在籍、洋楽専門誌『MUSIC LIFE』では編集長を歴任。1998 年にフリーランスへ転身し、洋楽／邦楽を問わず幅広い取材・執筆活動を継続中。

山﨑智之（やまざき ともゆき）

1970 年、東京生まれの音楽ライター。ベルギー、オランダ、チェコスロバキア（当時）、イギリスで育つ。1994 年から 1,100 以上のインタビューを行い、雑誌や書籍、CD ライナーノーツなどで執筆活動を行う。著書は『ロックで学ぶ世界史』。ブログは http://yamazaki666.com/blog/

梅沢直幸（うめざわ なおゆき）

（本書企画・選盤）

BABYMETAL を筆頭に、遺産から最先端まで独自の感性で多種多様なメタルを取り上げているメタル系音楽雑誌『ヘドバン』（シンコーミュージック）編集長。編集プロダクション「野蛮企画室」主宰。本書では企画とアルバム 100 枚の選盤を中心に担当。

武田砂鉄（たけだ さてつ）

1982 年生まれ。ライター。著書に『紋切型社会』『芸能人寛容論』『コンプレックス文化論』『日本の気配』『わかりやすさの罪』などがある。雑誌『ヘドバン』で「ヘドバン大学教養学部課題図書」を連載中。TBS ラジオ『アシタノカレッジ』金曜パーソナリティを務める。

行川和彦（なめかわ かずひこ）

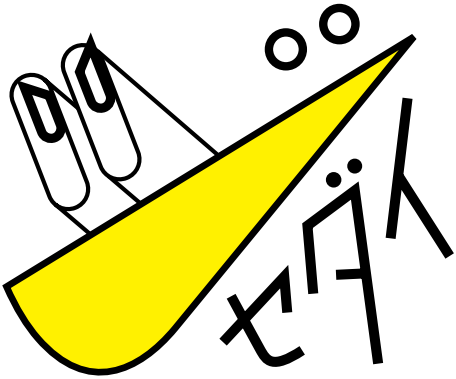
『パンク・ロック／ハードコア・ディスク・ガイド 1975–2003』（2004 年～監修も含む）、『パンク・ロック／ハードコア史』（2007 年）、『パンク・ロック／ハードコアの名盤 100』（2010 年）、『メタルとパンクの相関関係』（2020 年～BURRN! の奥野高久編集部員との“共著”）を発表。

西廣智一（にしひろ ともかず）

2006 年、「ナタリー」立ち上げを機に音楽ライターとしての活動を開始。2014 年末からフリーランスとなり、現在は WEB や雑誌を中心に執筆中。アイドルや俳優・声優をはじめ、オジー・オズボーンやジューダス・プリースト、メタリカなどのメタル系まで、インタビューしたアーティストは多岐にわたる。

長谷川幸信（はせがわ ゆきのぶ）

ジューダス・プリーストの『IN THE EAST』を聴いたことでヘヴィ・メタルに目覚め、18 歳で上京後には日本のヘヴィ・メタル・バンドにも脳殺される。その後はライターとしてのキャリアをスタートさせ、とくにバンドものを好んで現在も奮闘中。またマノウォーばりに常にバイクで取材場所まで乗り込んでいる。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!